

大学図書館問題研究会 京都

京都市左京区吉田本町

京都大学教育学部図書室

(竹村心気付)

TEL 075-751-2111 (内3013)

同志社大学における教育実践

— 民法A教授ゼミの事例 —

竹本文夫
(同志社大学)

はじめに

同志社大学では11年前に新図書館がキャンパスの中心部にオープンし、それ以来学生の利用が急増し今日にいたっている。図書館にとって立地条件、居住条件がいかに大切かをこのことは示しているといつてよいだろう。

しかし、原因はそれだけなのだろうか。利用条件に関するアンケート調査もおこなったが、その調査からは利用急増の理由までは明らかにならなかった。

経済実態、勉学から遊びまで含めた学生の全生活実態のなかに潜在的な図書館利用の要求がもともとあり、それが新館オープンを契機に顕在化したのではないか。そういった思いが常にあった。

丁度そこへ第11回全国研究集会(広島)にむけて京都から基本レポート「学生の図書館利用と大学教育実践」が提起されることになり、その内容が支部委員会で討論された。討論は私にとって実に時宜にかなった学習であった。長年大学職員として働きながら、一体私はどれだけ大学の授業というものを知って

いるだろうか。こんなことで図書館員として学生に適切に対処できるのだろうかと思った。

京都の基本レポートは行動提起の最初に教員への面接調査をあげている。その提起にしたがい私も面接調査をやってみて、この提起がどんなに重要かをしみじみ感じた。

教育実態を聞くのはもちろんだが、それ以外に、教育と研究のハザマで苦悩しつつ教育に全力投球するなま身の教員のきびしい生きざまに感動した。また、この面接調査のなかで、時間があるときは図書館の実状も話でき、個人的にはあるが図書館と教員の交流ができたことも成果のひとつであった。

〔I〕民法A教授

A教授は同志社の教職員組合に数年間数次にわたって設置された「図書館問題委員会」の最初の委員長をした人である。収書についても具体的にリストアップし、この本は1冊、この本は2冊、或いはあの本は8冊と冊数もすべて明記して図書館に何度か要求された先生である。こういう先生は図書館にとってもっとも大切な人であるが、予算の関係でなかなか要求にこたえられないため、図書館側で

は敬して遠ざける動きがなきにしもあらずである。

しかし、教学と図書館の係を知るには絶好の先生であると思ひ、まず最初に面接した。

海外留学の直前で、もっとも忙しいときであったが、無理して時間をさいて2時間余にわたって應對してくれた。

〔Ⅱ〕ゼミの構成

法学部では二年演習というのがあり、ここで学生は一応基礎的訓練をうける。ゼミは3年～4年の2年連続となっている。法学部の教員数からするとゼミ生の平均は1クラス25名くらいになるが、A教授は20名までを目安としている。法律では論争して勝つことを覚えなければならないからゼミでの討論はきわめて重要になるという。そのためには10名以上いたほうがよいという。実際に84年度では3年は21名、4年は18名。それぞれを4班ずつに編成している。

〔Ⅲ〕班単位で報告 — 準備は図書館で

報告のために班毎に下調べをし、討論をやり、想定問答の作成までやる。これを図書館でするのが、席が取れないと同志社には他に適当な場所がない。やむをえず大抵は喫茶店ということになる。だから席取当番までつくっている班があるという。とにかく班討論の場所としては図書館地下が最適であり、そういう場所の提供という機能も学生にとってきわめて重要だということである。

〔Ⅳ〕ゼミの運営

報告は、レジュメを全員に配布させ、15分間ということにしている。しかし3年生はなかなか15分ではできず、時間がどうしてもものびる。なれると段々時間内に報告できるようになる。

他の班から質問や意見ができれば、それにもとづいて討論するが、それがなかなかでない。でなければ、報告する班の質問担当者が次々と質問する。1回のゼミで%の人が当たる。

質問されたら起立。教師が「良し」といわないとすわれない。この小中高なみのやりか

たにはおどろいた。同志社でも他に例はあまり聞かない。しかし実際に非常に効果があるという。

「わかりません」という答は許されない。

「何が、どこから、何故わからない」かが明確でなければならない。ゼミで最初の質問にこたえられないと1時間以上立たされることになる。

「お前らゼミで恥かかんどこでかくんや。ゼミは恥かくとこや。ここで大いに恥かいて力をつけようや」、これがA教授がいつも学生に云う言葉である。

〔Ⅴ〕教師は最後の30分だけ発言

「良し」というのとたまに質問するのを別にすれば、90分のゼミのうち、60分は原則として沈黙。最後の30分に問題点、意見等を含めて教師が発言する。

〔Ⅵ〕本を読むことは強制している

今の学生は、詰めこみ教育や受験勉強の影響で、自発的能動的には本を読まない。彼等には本を強制的に読まして力をつけさせ、班やゼミでの討論で訓練するなかで学問研究の面白さに眼ざめさせるよりない。

したがって毎回3種類の参考文献を示している。

イ)必読文献 …… これは必ずコピーを作成し、全員に配布する。文献をさがしてコピーする担当者がいる。

ロ)できるだけ読んでほしい文献

ハ)興味があれば読めという文献

〔Ⅶ〕月に1～2回小レポート

これは必ずしも毎月ではない。必要に応じて。3年前期はほとんど毎月提出させる。

〔Ⅷ〕期末にまとまった論文の提出

特に4年生は30枚以上100枚以内のゼミ論。

〔Ⅸ〕学生の連帯の重視

① コンパ …… 年7回。そのうち5回は3・4年合同コンパ。1回はO・Bを含めた全体の泊り込みコンパ。夕方集まって飲んでしゃべって、翌早朝解散。1回のみが自分達のクラスだけのコンパ。これはタテの関係を重

視しているからという。勉強のしかたから就職の相談までいろいろメリットがあるという。

② ゼミ旅行 …… 年1回、2泊3日。六法持ち込み不可。即ち、勉強なし。スポーツに徹する。たとえばテニスをやるとすると18名であれば、幹事がコートを9面一日借り切る。休むとお金ももたないといわれる。といったぐあい全員クタクタになる。これで全員が徹底的に親しくなる。一度だけ勉強をやってはどうかと教師から提案したことがあるが、全員一致で拒否され、以来2度と提案はしないそうである。

コンパとゼミ旅行で仲間になった効果はてきめんに勉学の上に助け合いとなってあらわれる。資料のさがしかたなど図書館利用法はたいがい先輩や仲間から教えてもらっているようである。なかには動く図書館といわれるようなすごいものもある。

とにかく図書館へ行けば必ず誰かA教授ゼミファミリーにあえると云われている。

③ ゼミ機関紙 …… 年1回発行。優秀なゼミ論数編を中心記事とするが、その他にもいろいろのせている。たとえば、84年度の場合、教師の写真、ゼミ生の自己紹介やゼミの感想、教師によるゼミ生一人ひとりについてのテーマと論評、「A教授の最近の論文から」、O・Bを含む全ゼミ生の住所録、A教授の著作目録などである。A教授によると、機関紙に自分の最近の論文を紹介されるので、「しっかりいいものを書かんならん。ましてやなにも書かなんだら著作目録も去年と一語で学生に大きな顔もできんようになる。学生やO・Bは一年間に論文がなんぼふえたかよう見とる」ということで研究も可能なかぎりがんばらないと教育にもさしつかえるという。

85年度はさらに「O・Bだより」が追加されるらしい、ということであった。

編集は担当幹事を中心におこない、教師はノータッチ。要請に応じて原稿を書くだけという。

この機関紙はO・Bにも無料で郵送されるが

同時にカンパのお願いも同封。7～8割は応じてくれるそうである。

④ 財政 …… 毎月2千円の積立と年1～2回臨時会費を集める。それとO・Bのカンパも貴重な財源。支出は大半がコピー代とゼミ機関紙代に。コンパやゼミ旅行にも補助する。

以上ざっとスケッチしたが、ゼミ運営は、教育・研究に関することは教師によって、他はすべて学生の自主性によっておこなわれるのを原則としている。そのためにいろいろな幹事がいる。EVENT企画幹事、機関紙編集幹事、財政担当幹事、ゼミ代表幹事、その他。3年生で運営のわからない幹事は先輩に聞いたり相談したりする。ここにもゼミ同志のタテの関係を重視する効果があらわれている。今の学生は民主的運営ということもよく知らないからである。

他の教師のゼミとくらべてコンパの回数は多く（普通は年1回）、ゼミ旅行も多くは集中ゼミになっているのに遊びに徹するというのもユニーク。ゼミ論を印刷しているゼミは多いが、機関紙という性格にしているのもめずらしい。

〔X〕 A教授の図書館への要望

① 開館時間を変更するな！

常に9:00～21:00とせよ。同志社では春休み、冬休みは、9:00～16:00、夏休みは9:00～12:00、通常時9:00～21:00としているため、うっかりでかけていって無駄足をふむことがある。また、春休みや夏休みこそじっくり勉強したいのに開館時間が短くなるのは困る。特に夏の午前中のみというのは話にならない。これは図書館に利用させる意志がないとしか思えない。図書館の人達や学校当局は、学生生活の24時間を知る必要がある。

② コピー機能の強化をはかれ！

・現行は2台であるが、いつも行列で時間がむだ。せめて10台にせよ。

・料金20円は高い。せめて一般並みに10円にせよ。うちのゼミはコピーが多いから財政を

コピー代が圧迫している。

・コピーはセルフと注文の2本立てに。料金は注文が高くなってもよい。

③ 文献複写サービス、もっと宣伝を!

多くの学生が知らない。非常に有効なサービスなのにまったくもっていない。

④ 閉架図書についても宣伝の強化を!

これも案外知らない学生が沢山いる。何十万冊もの蔵書を死蔵するとは、まったくもっていない話。

⑤ 開架の法律専門書をせめて2倍に

現在は約8千冊であるが、これではすくない。妙な本でレポートを書くので、学生を呼びだして聞いてみると、この主題では開架にこの本しか残っていなかった、という。こんなことが再三再四ある。

⑥ 基礎的文献は最低10セットおけ。

ゼミとかレポートとかで学生が本をどっと借りに行くことを考えてほしい。ほんとうはもっとほしいが現実には妥協して10セットというのだ。そして1セットは禁帯にしてせめて1冊はいつでも見られるように。

⑦ 収書は俗物に迎合せず、毅然とせよ。

くだらない本は金の無駄だけでなく、それ

を借りて読む学生にとっては時間の無駄でもある。

⑧ 図書館長は若手のやる気のある人を。

これはあなたがたにいてもしょうがないが、単なる名誉職では困る。資料さがしにもっとも苦労している現役若手の行動力ある人を望んでいる。

おわりに

他の先生にもいろいろ面接し、貴重な話をたくさん聞いた。又、ゼミだけでなく一般教育、専門の講義等、その人がもっているすべての授業について話を聞いた。しかし、紙数の関係で省略する。いずれ論文集でくわしく紹介したい。A教授の場合は図書館に強い関心を持ち、また学生に図書館を利用させることを常に念頭において授業しているきわめてめずらしい例外的な先生である。多くの先生は面接しても必ずしもあまり図書館と関係しないことが多い。その専門の性格にもよる。しかし、話の内容はみなすばらしい。同じ大学に働く仲間として教員の授業実態を知るとは、図書館員でなくとも、相互理解を深め、団結強化するうえで必要であると思う。

大 図 研 学 校 ・ お し ら せ

第I期大図研学校(後期)のテーマは、会員アンケート(1984・12実施)でも希望の多かった参考調査活動についてとりあげます。

第1回 「大学における参考調査活動」

講師 長 沢 雅 男(東京大学教授)

1985年10月12日(土)P.M. 2:00—4:00

京 大 会 館 (予定)